

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

書評 Simon Horobin, Chaucer 's Language, Palgrave Macmillan, 2007

著者	片見 彰夫
雑誌名	埼玉学園大学紀要．経営学部篇
巻	9
ページ	229-232
発行年	2009-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000666/



Simon Horobin, *Chaucer's Language*, Palgrave Macmillan, 2007

片 見 彰 夫

KATAMI, Akio

1. はじめに

本書は英詩の父と称されるイングランドの詩人 Geoffrey Chaucer (c.1340-1400)の作品を、当時の言語であるMiddle English (以下ME) の知識が十分とはいえない読者でも理解できるよう意図して書かれたものである。著者はグラスゴー大学の准教授であり、*An Introduction to Middle English* (Edinburgh University Press, 2002)、*The Language of the Chaucer Tradition* (D.S.Brewer, 2003)といった著書を発表している英語史学者である。現代英語とは異なる点が多いME作品は、英語を母語とする者でさえ翻訳を通して理解されることが少なくはない。その姿勢に対して、本書では原文を読むことでのみ得られる作品の味わいや息吹が一貫して述べられている。またChaucerを中心に据えながらMEへの理解も深められるように構成されている点が特筆される。さらに各章末に知識を深めたい読者に向けて参考文献が紹介されており、これらを手掛かりに研究を進めることができるような配慮がなされている。Chaucerの英語について書かれた著作は数多いが、本書による新たな視点としては韻文と比べて、従来扱われることの少なかった散文の文体論についての第7章、そして第8章の談話分析と語用論の知見を利用した考察が挙げられる。作品中の登場人物の会話に、現代の言語学理論を応用することで、鮮やかに作品世界を描き出す手法が浮き彫りにされている。これはSchlauch (1952)、Salmon (1975)、Burnley (1983)といったChaucerの文体や口語性に着目した先行研究をさらに発展させた貢献といえよう。その

新たな知見を、明快に提示しているところはこれまでの類書にはみられない点である。

2. 各章の概要と解説

各章ごとの要点を部分的に紹介しながら、解説を加える。

第1章 Why study Chaucer's language? では綴りが現代と同一語とみなされる場合でも、意味が当時とは異なっていることに注意を払うべきことが指摘される。例えば'nyce and straunge' (*Troilus and Criseyde* 2.24) におけるnyceは現代の意味'agreeable, pleasant, satisfactory'ではない。ここでは'foolish'が語義である。さらに注目すべき点として文脈を参照することの重要性を挙げている。Lat be youre nyce shame and youre folie. (*Troilus and Criseyde* 2.1286) 後に'folly'を語義とするfolieが続くことからnyceを'foolish'の意味にとると冗長的になることから'sluggish, weak, timid'とする方が適切な解釈であると述べる。繰り返し用いられるキーワードの理解は特に重要である。形容詞gentilは育ちの良さと関連する'courteous', 'noble', 'generous'の意味であり、verray, parfit gentil knight (General Prologue A 72) では、現代英語の'tender', 'mild'は意味されていない。このように一見、現代英語と同じと思われても異なる解釈が生じるのは時制の転換といった文法面にも及ぶ。継続している動作が完了することを表すために現在から過去へ、話の新たな展開では過去から現在へと時制が移ることによって表現されている。さらに韻文であることから押韻

キーワード: ジェフリー・チョーサー、チョーサーの言語、原典を読むことの重要性、文体、談話

Key words: Geoffrey Chaucer, Chaucer's language, importance of reading in the original, style, discourse

との関連性も考慮する必要がある。MEは現代英語の知識があれば理解できる部分も少なくないが故に、語義解釈には細心の注意が必要な点である。

第2章 Writing in English. 14世紀後半はラテン語やフランス語が英語と混交して用いられていた時代であった。公の場では未だ英語が未確立であった時代背景の中、英語で著述したChaucerは、フランスやイタリアの文学を念頭に置いたヨーロッパ文学の一環として英文学をとらえようとしたのではないかという主張を展開する。英仏百年戦争等の出来事が原因でイングランドにおいて国家主義が高まった背景と、Chaucerが英語で著述したこととの関連性を論じたJones(2003)のような文献に対しては異論を唱える。筆者によれば、自国民とのコミュニケーションとすることが英語を用いた目的であった。英語の価値を高めるためというのは結果にすぎず、ましてや国粋主義といった政治的意識とは関係がない。英語は当時既にイングランドでは階級に関わらず用いられており、豊富な多様性と、死語にはないニュアンスを表現できるまでに成熟していた。Chaucerはその体现者であるという著者の主張には説得力がある。また登場人物に合わせて様々な方言を文学に取り入れた最初の作家であることも指摘しており、社会言語学的視点からもこれは発展性のあるテーマであるといえるであろう。

第3章 What was Middle English? カンタベリー物語のHengwrt、Ellesmere各写本は同一の写字生によるものにも関わらず、否定辞*noght*と*nat*のようにスペリングにバリエーションが生じている。ここから14世紀後半から15世紀初めという当該時代はロンドン英語においてスペリングの標準化が未然であったことが明らかにされる。従来はME初期のロンドン英語は標準化が進んでいたとされる見解が一般的であるにも関わらず、Chaucerの一作品からその反例を示すという手法は、個人の言語分析からME全体への視座を示すという本書を貫く姿勢を表わしている。

第4章 Spelling and pronunciation. Chaucerの綴りと発音を音読の観点から論じる。MEと現代英語を対比させながら、Chaucerの押韻について述べている。本章末の参考文献にはインターネット上で利

用可能な朗読サイトもいくつか紹介されており、役に立つ。

第5章 Vocabulary. 同義語ではあるが、生起する文脈を追うことでその語に込められたChaucerの含意が分かる。例えば‘compassion, mercy, pity’といった意味をもつ*routhe*と*pitee*との同義語とされる*misericorde*は、宗教上の意味を持つ文脈のみに特化して現れるといった点である。またChaucerといえ、英語にフランス語を豊富に取り入れたことが強調される傾向にあるが、その一方で古英語に既在しており、ME初期には廃れていた語を多用した点にも着目している。例えば古英語で「船底の湾曲部」を表した*thurrok*は、MEでは、*the Parson's Tale*が初出である。また動詞の意味を強めるfor-接頭辞を付加することで新語を作る古英語からの造語法もChaucerは頻用していたことを示す。MEは方言の時代であることから、Chaucerはこれを作品にも反映させている。現代英語の人称代名詞*them*と*their*は作品中のLondon方言では*hem*と*hir/her*であった。*them*と*their*は当時の北部方言であったことから、Chaucerは*The Reeve's Tale*では北部出身の学生の言葉で用いている。また実際に作品を読むことによって分かる語の含意も興味深い。*corage*は*Middle English Dictionary*の語義では、‘inclination or desire’であるが、文脈を考えれば、ここには‘the strong sexual overtones associated with an elderly man's desire to marry’、といった内容が含意されているのである。これらの解釈はいずれもME原文を通してこそ明らかになる点であり、翻訳に頼ることの弊害を唱えているといえよう。

第6章 Grammar. MEから始まった形容詞強弱変化の消失は話し言葉において最も早く生じたと考え、‘O good Em.’と、‘goode Nece’という対話中の言葉から会話では強弱変化の揺れが生じていることを例示する。仮定法(subjunctive)は、屈折語尾の水平化から消失したとされることで片づけられることがほとんどだが、ここでは押韻上の理由と、不確かさを嫌う登場人物の性格が直接法を選択させるという作品内容に踏み込んだ解釈がなされている。また二重否定の否定辞*ne*は脱落していく過程を辿るが、著者はこれが会話文中心に生じていることに言及し、

口語用法がその契機となっているという説明を行っている。昨今、言語変化の原因を探る手段として、膨大な言語資料を処理することができるコンピューターコーパスを利用する研究が盛んである。それに対して著者の姿勢には作品に向きあうことに重きをおく文献学の姿勢がある。活用語尾の水準化は英語の通時的变化として取り上げられる、いわば教科書的項目であるが、文体との関連からChaucerの口語体と音調という本書を貫く観点から述べられている点は興味深い。

第7章 Language and Style. 語彙における高尚体と低俗体の巧みな使い分けに着目した前半部と、散文の文体について論じた後半部分から成っている。現代言語学の言語使用域 (register) の概念を用いながら、同義語の使い分けに言及する。Chaucerの散文ではフランス語翻訳からの影響から、法令文や議会文書にみられる ‘curial prose style’ の影響を受けているという特徴を指摘している。その特徴は曖昧さを避けるためのフランス語 ‘le dit’ の逐語訳となる ‘the syde’ 等の解釈を付け加える語句を活用することにある。もう一つの特徴としてフランス語からの翻訳にあたって二項語へと書き直している点を述べている。二項語は法令文書の特徴でもあったのである。

第8章 Discourse and Pragmatics. 語用論の観点から、「呼びかけ表現」、「丁寧表現」、「罵り言葉」、「談話標識」や登場人物ごとの「話し言葉の文体差異」について考察されている。話し言葉に着目した点はME研究の新たな可能性を開いたものとして評価できる。呼びかけの際、元来敬称であるsirが騎士の名前に付いた場合は嘲りの含意があるという解釈は、語彙の意味からだけでは決して得られない。現代英語では罵り表現で現れる性的、排泄に関する言葉はほとんど用いられていない。代わりに ‘olde cherl’ のように不躰な名前の呼びかけがその働きを果たしていたと述べる。談話標識としては *well* と *lo* を説明する。*well* は新しい話題の導入等の働き、*lo* は聴衆の関心を引く等の機能を果たしていることを明らかにする。ME後期の談話標識について本稿筆者が、埼玉学園大学紀要経営学部篇vol.6(2006)に “Thomas Maloryのアーサー王物語群における談話

標識” で述べた用法と共通する見解もあり、これらはMEでは一般的な特徴であったこともうかがわせる。また作品中の話し言葉を口語的文体と、宮廷言葉とで対照させることで、登場人物の性格を浮かび上がらせる試みは社会言語学の成果をME文学解釈に応用したもので、学際的な発展性のある観点だと思う。

3. 結び

Chaucerの言語を英語史の大きな流れの中に据えて考察している点、そして音声や談話分析といった手法を通じて中世から現代英語へとの橋渡しが行われていることは本書の一貫した姿勢である。類書にはない点として、社会言語学や談話分析といった英語学の最新の知見を視座に入れ、14世紀のChaucerの言語に光を当てていることが挙げられる。Chaucerに限らず中世の読書では、朗読を聞くという聴衆の立場を重視する必要性がある。これは現代英語の文体研究とは異なる着目点であり、これからChaucerを読もうという者にとっては有益な前提的知識である。一人の作家の言語を土台にME文法や語彙を概説することは読者には丁寧な導きとなり、高く評価できる点ではあるが、紙数上の理由からか解説が、所々中途半端になってしまっている。そのため知識を補うために、関連書や章末に紹介された関連文献を読むことが求められる。しかし、この点は決して本書の価値を左右するものではない。2009年8月28日から30日まで広島大学霞キャンパスで開催された国際学会The 3rd International Conference of the Society of Historical Language and Linguistics (Shell)における第1日目のシンポジア *The Language and Style of Chaucer* (Chair: Jimura, Akiyuki) で文体に着目した文献として、本書がConference Abstractsで引用されていた。入門書にとどまらず、学術書としての価値をも有しているとされる証左である。新たな研究成果を自らの講義に活かし、学生への教育へと還元していくことに繋がる本書の姿勢からは学ぶべき点が多い。

参考文献

- Burnley, J.D. (1983) *A Guide to Chaucer's Language*.
London: Macmillan-now Palgrave Macmillan).
- Jones, Terry (2003) *Who murdered Chaucer?: A
Medieval Mystery*, London: Methuen.
- Salmon, Vivian (1975) "The Representation of
Colloquial Speech in *The Canterbury Tales*," *Style
and Text: Studies Presented to N.E. Enkvist*,
Stockholm: Sprakeforlaget Skriptor AB and Abo
Akademi. 263-277.
- Schlauch, Margaret (1952) "Chaucer's Colloquial
English: Its Structural Traits," *PMLA*.LXVII, 1103-
1116.